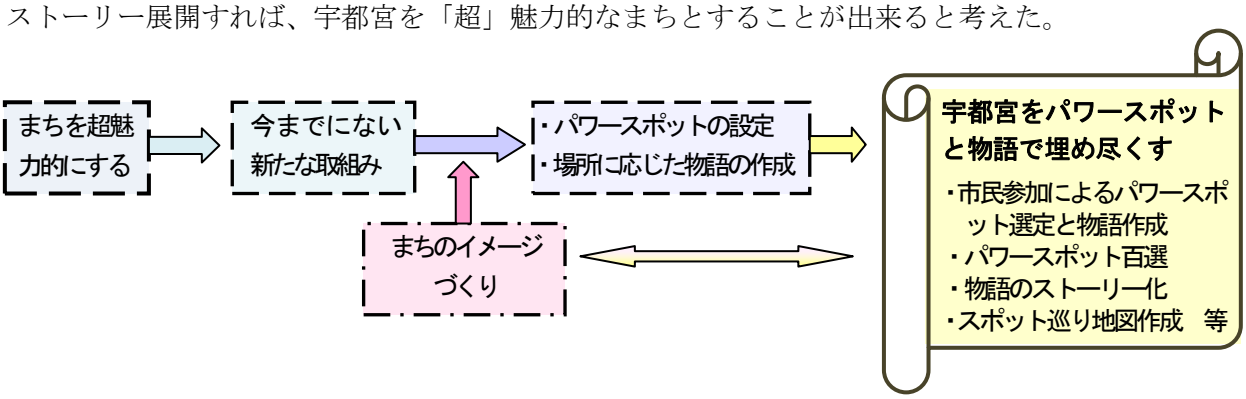
No	提　案　名	提案団体名		
		代表者氏名	所　属	
6	パワースポットによる 超魅力的なまち―宇都宮―の創造	宇都宮共和大学　山島ゼミ+都市アメニティ研究会		
		石川　茜	宇都宮共和大学　シティライフ学部	
			指導教員 氏　　名	山島　哲夫

1　提案の要旨

宇都宮を「超」魅力的なまちとするためには、これまでと違ったアプローチをする必要がある。餃子、大谷石、LRT など宇都宮を魅力的にする場所や資源は多くあるが、「超」魅力的というためには、他の都市で余り行われていない新たな取り組みを始める必要があると考えた。私たちは、超魅力的なまちは、まちにいながらにして、何かしら元気の素（パワー）を与えてくれるようなまちだと思う。そこで、「パワースポットによる「超」魅力的なまちづくり」を取り上げることとした。

宇都宮中を、人々に元気を与えてくれる数々のパワースポットで埋め尽くし、市民も来街者も様々なパワーをもらえるまちとすることが「超」魅力的なまちにつながるのではないか。この場合、単に、パワースポットを設定するだけではなく、そのパワースポットごとに物語をつくる（それを更に一連のストーリーとする）ことによって、多くの人により親しみを感じさせることが可能になり、パワースポットとしての定着にもつながっていく。

私たちの考える 9 か所のパワースポットについて、その場所の物語を作ってみた。宇都宮百景と同じように、「宇都宮パワースポット百選」を選定し、その場に相応しい物語をつくり、それをストーリー展開すれば、宇都宮を「超」魅力的なまちとすることが出来ると考えた。



2　提案の目標

宇都宮市は、「選ばれる都市」を目指し、都市自体にブランドとしての価値を見出す「宇都宮ブランド戦略（UTSUNOMYA PRIDE）」を策定し、ブランド化を推進している。

○ブランド戦略の考え方（「宇都宮ブランド戦略指針」より）

「都市そのものが持つイメージ」が存在し，これを高めることで，都市の魅力や価値，又は個別商品の価値が高まり，ひいては交流・定住人口の増加などに結びつく効果が期待できるものが「都市ブランド」である。

ブランド化には良好なイメージが大切である。イメージをつくり出すためには、モノや場所だけではなく、モノや場所の背景にそれらに相応しい物語があることで、その場所により鮮明なイメージをつくりだすことができる。宇都宮は、江戸時代に領主が度々変わったこと、戦争で市街地のほとんどが消失してしまったことなどから、歴史的なイメージが捉えづらい都市になってしまった。宇都宮の様々な場所にいろいろな物語を創出することにより、宇都宮の新たなイメージをつくり出せるのではないだろうか。

宇都宮市内に数多くのパワースポットを設定し、パワースポットと物語で市内を埋め尽くすことができれば、宇都宮のイメージアップにつながり、宇都宮中の至る所に足を運ぶ市民や来街者を作り出し、宇都宮の活性化にも寄与すると考える。

３　現状の分析と課題

1）パワースポットについて

パワースポットは、「霊的な力が満ちているとされる場所」あるいは「大地のエネルギーを取り入れる場所」などといわれており、自然系と神社などの宗教系のものがあるといわれている。自然系のパワースポットでは富士山などの山岳や森、雄大な景観を有する自然などがある。一方、神社仏閣などの宗教系のものとしては、伊勢神宮や日光東照宮などが代表的である。神社仏閣なども、パワースポットといわれるところは、自然や大地の力を感じられるような雰囲気の場所に囲まれていたり、背後に山や森などの自然があるのが通常である。何らかのパワーを宿している土地であることがパワースポットの条件といえる。

私たちは、宇都宮のパワースポットを選定するに当たって、以上の条件に加えて、極端な宗教性や偏った信仰を前提としたものを排除する必要があると考えた。そうした場所は、多くの市民の共感を呼ぶことは無いし、永続性もないと考えられるからである。宇都宮で選定するパワースポットは、そこを訪れることにより、何らかの元気の素（パワー）を感じられる場所である。しかも、誰もが訪れやすい場所であることも大切である。

宇都宮には、現在、観光客を大勢呼び込めるようなパワースポットは少ない。市民がパワースポットとして感じている場所としては、二荒山神社や初もうでに訪れる神社などがある。しかし、宇都宮発祥の地である二荒山神社も、外からの観光客を呼び込む場所とはなっていない。一方、観光客が多く訪れる場所に大谷資料館があるが、こちらはパワースポットとして一般的に認知されているとは言い難い。

そこで、宇都宮に、ある意味で今まで眠っていた資源・場所をパワースポットとして見つめ直し、そのパワースポットを市民みんなで盛り上げる取り組みが「超」魅力的な宇都宮をつくり出すのではないかと考えた。

2）まちづくりと物語

全国の様々なまちで、まちづくりの一環として「物語」が注目されるようになった。都市のハード（物理的）な側面では合理性に基づいて計画なり整備が行われているが、それに加えて、何らかの精神的なよりどころがあることが、まちに愛着を生み魅力を高めると考えられるようになってきている。

まちの物語は、地域の様々な歴史や伝統・謂われなどをもとに作られることが最も好ましく、そのことで、その地域に定着していく。しかし一方で　映画のロケ地などが聖地とされ、いわゆる「聖地巡礼」というような現象も発生している。古くは、二十四の瞳から映画村を立ち上げた小豆島があり、最近では、アニメに描かれた場所が聖地となって、そこに多数の人が訪れるという現象も起きている（例　君の名は）。こうした現象が長く続けば、それが地域の歴史や伝統に組み込まれていく可能性もある。人々は、まちに物語を求めていると考えられる。物語があることで精神的なよりどころを得ることが出来る。

私たちは、パワースポットに「物語」を合わせることにより、パワースポット自体の魅力を高め、パワースポットとして定着していくと考えた。もちろん、地域の実際の謂われや歴史に根差したものであれば、さらに魅力的な物語にすることができる。

今回の私たちの提案では、地域の実情をあまり考慮せず、ひな形としてとりあえず創作したものであるが、今後地域に残された歴史や謂われを取り込み、より良いものとしていく必要がある。

3）パワースポットの選定

本提案では、９か所のパワースポットを選定した。選定に当たっては、上記に書いた条件に加えて、一人の人間が生まれ、様々なことにチャレンジし、思い、悩み、幸せを掴んでいく契機と

なるのに相応しいという観点で考えた。また、宇都宮市内の地域的なバランスも考慮した。

具体的には、私たちがゼミ活動の一環としてまち歩きをしている中で見つけた場所、メンバーが良く行く場所の中から選定した。ここで提案した９か所は、豊かな自然、何らかの神秘性、歴史的な経緯などがあり、十分にパワースポットになりうる資格があると考えた。

４　施策事業の提案

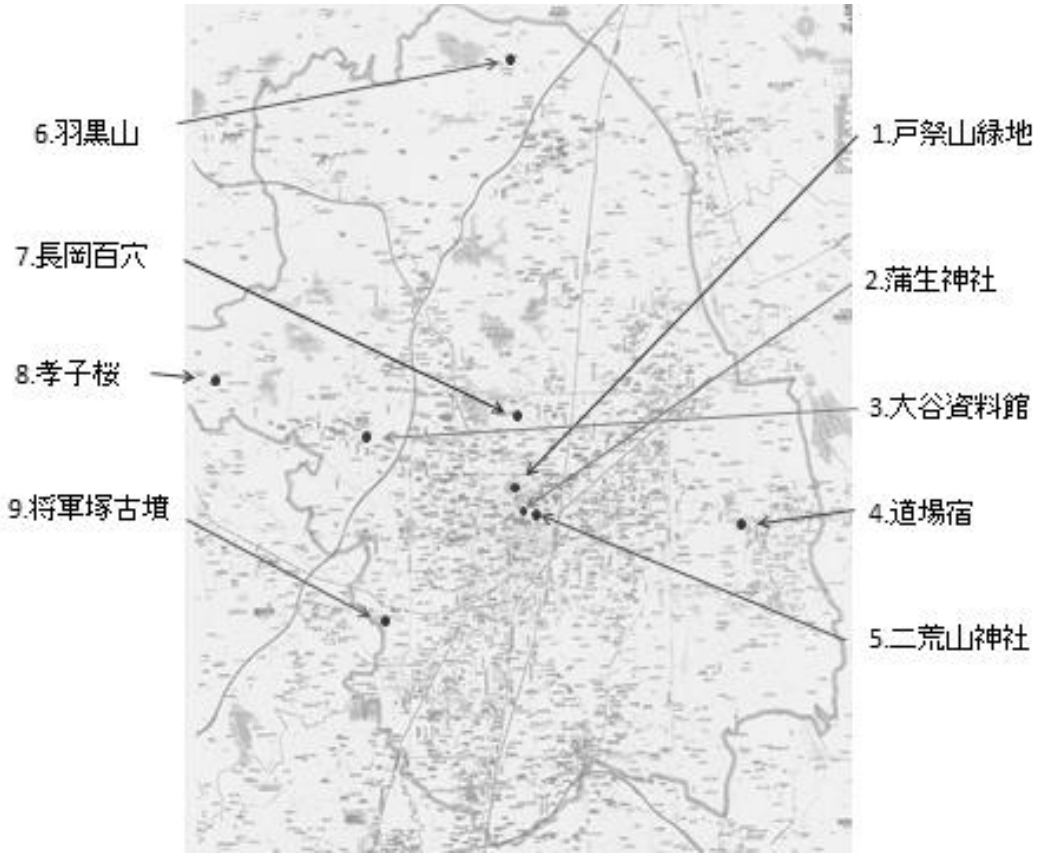
1）パワースポットと物語

パワースポットに関連する物語は、地域に昔からある云い伝えなどを基にすることにより、地域にしっかりと根付くと考えられる。しかし、ここではあえて、全く新しい物語を創作した。地域の云い伝えや謂われなどは、地域の人々の協力を得なければ簡単に探ることが出来ない。更に、９か所のパワースポットを一連のストーリー展開するため、新たな物語を創作することとした。

なお、新たな物語展開を考える場合、宇都宮生まれの人を想定したキャラクターを作り、その人の一生を描く形でパワースポット巡りをさせる方法もある。

今回の物語は、1930 年代に生まれた男性「寛（ひろし）」を主人公に、人生の節目節目に宇都宮のパワースポットを訪れることにより、幸せを掴んでいく寛とその妻祥子のストーリーとした。

＜提案したパワースポットの位置＞



パワースポットは、宇都宮の中心部に戸祭山緑地、蒲生神社及び二荒山神社の 3 か所を設定し、少し郊外に行った長岡百穴を含めて比較的中心部に固まっている。東側は鬼怒川沿いの道場宿、北側は旧上河内にある羽黒山、西側は大谷資料館と孝子桜、南西部に将軍塚古墳が位置している。

１. 戸祭山緑地　　テーマ　：人の誕生・出生への感謝
主な対象：あらゆる年齢層

2009 年まで斎場として利用されていたが、丘陵地に広葉樹と落葉樹が茂り、昔ながらの森として残されている。また、湿地や池が点在し、市の天然木記念物であるトウキョウサンショウウオが生息し、県のレッドデータブックに記載されている希少種の動植物も生息している。宇都宮市に残された貴重な自然といえる。この場所は、宇都宮の昔の自然の風景を残していると考えられ、生命誕生の力を感じることが出来ることから、あらゆる階層にとって様々なパワーを得ることが出来るパワースポットである。

＜物語＞

時は 1930 年代半ば、妻に先立たれた白髪混じりの暉雄（てるお）は戸祭緑地にキノコ採りに来ていた。ここは、起伏は激しいが豊かな自然に恵まれていた。タカやカワセミ、タヌキなどの動物も生息していて自然の楽園であった。キノコ採りに夢中になっていると、突然「オギャッー！」という声が聞こえた。暉雄はびっくりして、音の方に行くと、若い女性が赤子を抱いて池の周りを彷徨っていた。聞いてみると、「この子を抱いて歩いていたら、知らない間にこの池の周りに来てしまいました。この子が生まれる直前に、最愛の夫が亡くなり、自分でも何をしているか分からなくなっていました。」それを聞いた暉雄は、この場所で出会ったのは、2 人を助けろという啓示ではないかと考え、女性と赤子を育てる決意をした。すると、森の奥から、「この子は将来立派な人物になる、大切に育てなさい」という優しい声が聞こえた。暉雄は、赤子に広い心を持ったおおらかな人物になってほしいという願いから「寛」と名付けた。

２. 蒲生神社　テーマ　：学問成就
主な対象：10 代の学業を志す若者

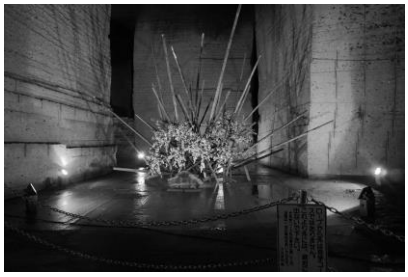
蒲生君平は江戸時代の儒学者、林子平、高山彦九郎とともに「寛政の三奇人」と呼ばれた、宇都宮を代表する知識人である。蒲生君平を祀る蒲生神社は、学問のパワースポットとして受験生をはじめ多くの人が訪れている。若くして学問で身を立てる決意をした蒲生君平が祀られているこの場所は、学問を志す人にとって貴重なパワーを得ることが出来るパワースポットである。

＜物語＞

寛は、暉雄と母親のもとで自由気ままに暮らしていた。学校の勉強もせず、親の手伝いもしないで、毎日、野山を走り回って遊んでいた。「立派な人物になる」という啓示を受けていた暉雄は、学問を学ばせることが必要だと考え、まず本を買い与え読書をさせようとした。しかし、一向に机に向かうことは無く、相変わらず近所の子ども達の先頭になって走り回っていて、周囲からひんしゅくを買っていた。そんなある日、近所の長老から、「この近くに学問の神「蒲生君平」を祀った神社がある。そこに連れて行くといい」、といわれた。さっそくその日のうちに寛を連れて、蒲生神社に行った。寛は、神社の前

ではしゃいでいたが、突然、静かになり、じっと聞き耳を立て何か考え込んでいるようであった。次の日、暉雄が起きてみると、寛は、買い与えた本を眺めていた。それから、少しずつ、勉強に身が入るようになり、暉雄に、「僕は大学まで行って、色々なことを学びたい」とまで、言うようになった。この変化に驚いた暉雄は、寛を応援し、5 年後無事宇都宮にある大学へ入学することが出来た。

３.大谷資料館　テーマ　：未来への夢
主な対象：将来への夢を抱く 20 代の若者



大谷資料館は、地下の巨大な空間に幻想的・神秘的な光が溢れている。コンサート、演劇、映画会、美術展をはじめ様々な用途に使用されており、若い世代に夢を与えることが出来る場所である。オーロラのような光に包まれながら、未来への希望を感じとることが出来るパワースポットである。

＜物語＞

寛は、大学に通っていたが、将来について迷い、悩み、勉学に身が入らずパチンコや麻雀などにのめり込んでいた。それというのも、寛は、世間一般の普通の生活ではなく、大きな成功を遂げたい、と考えていたからである。そんな時、大谷の採石場跡が素晴らしいと耳にした寛は、気晴らしに行ってみることにした。中に入ると驚くほどの広大な空間が目の前にあり、声も出せなかった。「身近にこんな場所があったなんて。」大谷の力に圧倒された寛は、思った。「自ら会社をつくり経営者になって、世の中の役に立とう。このまま遊んでいてはいけない。」

それから、寛は、自信にみなぎり、勉学に励むようになった。それまで遊んでばかりいたが、卒業するころには周りの人に一目置かれるような存在になった。寛は、未来について考えるきっかけを与えてくれた大谷の採石場跡に今でも折に触れ足を運び、当時のことを懐かしく思い出している。

４.道場宿　　テーマ　：独立・起業
主な対象：20 代から 30 代の新しい生活を目指す若者

道場宿は、河岸と宿場が一体となった、江戸時代の宇都宮の物流の中心であった。この地から、水運で宇都宮から江戸まで多くの物資が運ばれた。かつての経済の中心地でもあり、経済的な活動へのパワーを得ることのでき

＜物語＞

大学で学び終えた寛は、どのような会社を興すか考えながら鬼怒川沿いを散歩していた。座れる場所を見つけて腰を下ろすと、気分が落ち着いた。そこは後ろに大きな緑があり、前には静かに鬼怒川が流れていた。周りには釣り人がちらほらいるだけで、寛は再びじっくりと考え始めた。「確か、ここは道場宿の緑地・・・江戸時代に宇都宮の物流の中心だった場所だ。この鬼怒川を通じて、江戸に物資が運ばれていたのだ。ところで、今の日本の貿易はどうなってい

るのだろう。これから、世界に開かれ海外との交易も盛んになるのではないか。そうだ、貿易会社を作ろう！」

そう決めると、寛は学生時代の仲間（遊び仲間）に声をかけた。卒業間近になってからの寛の頑張りを知っている仲間たちは、寛の考えに賛同し、寛を助け一緒に会社を設立するために奔走してくれた。歴史的な重みと、水と緑という豊かな自然があるこの地は、寛に素晴らしいパワーを与えてくれた。

５.二荒山神社　テーマ　：恋　結婚

主な対象：20 代から 30 代の幸せな結婚を望む人

宇都宮発祥の地である。宇都宮市民が最も多く訪れる神社であり、宇都宮のシンボルの一つとなっている。この神社は、新たな生活を踏み出す行事が多く行われており、中でも結婚に対するご利益があるといわれている。結婚を控えた人、結婚を望んでいる人にとって幸せな結婚へのパワーを与えてくれるパワースポットである。

＜物語＞

寛は、昔からの夢であった自分の会社を持つ事ができ、会社も順調に成長していた。しかし、寛にはもう一つ大きな願いがある。それは結婚である。寛には学生時代に知り合った祥子という女性がいる。祥子は堅実な家庭で育てられていたため、遊んでばかりいたころの寛を知っている親に、寛と結婚したいと思っていることを言えずにいた。

ある日寛は、祥子を二荒山神社に呼び出し、「俺も決意を決めた。お前の両親に話して結婚を許してもらう。お前の両親も俺が遊んでいたのは知っているから、ただ口で言っても信用してくれないと思う。だから、一回俺の会社を見に来てもらって、しっかりお前を支えられるってところを見せたい。」と宣言した。すると祥子も涙をこらえながらゆっくりうなずいてくれた。「そしてお前をこの神社に呼んだ理由は一緒にお参りするため。この神社は結婚に対するご利益が強いからきっとパワーをくれるよ。」二人は一生懸命お参りをした。

その後、寛の会社を見に来た祥子の両親も、この調子なら祥子を安心して嫁に出せると結婚を快諾してくれた。二人は神社のパワーのおかげだと感謝しながら無事結婚することが出来た。

６.羽黒山神社　テーマ　：子宝

主な対象：20 代から 30 代の夫婦

標高 470mの羽黒山の山頂に鎮座する神社。山頂からは宇都宮市全体を見渡せる。広い視野と人生の展望を切り開くパワーを得ることが出来る。羽黒山には夫婦杉と呼ばれる 2 本の幹が根元で繋がった縁結びの杉と幹の途中が膨らんでいる子宝杉がある。子宝杉は子宝に恵まれるためのパワーを与えてくれるパワースポットである。

＜物語＞

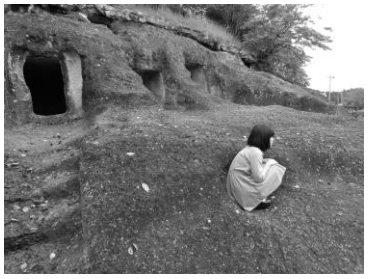
結婚から数年がたち、寛は、仕事に行き詰まりを感じていた。それを見ていた祥子は、気分を良くさせようと、次の休日、羽黒山へハイキングに出かけようと持ちかけた。羽黒山の頂上に登ると、見渡す限り宇都宮のまちが広がっていた。寛はこれを見て、少し気持ちが楽になった。頂上を後にして、下座している途中、子宝杉の隣を通り過ぎた時、何かに呼び止められた

ような気がした。２人は同時に体の中が暖かくなる不思議なパワーを感じた。

それから一月後、寛の仕事も少し軌道に乗り出し始めた時、祥子には新たな生命が宿っていることが分かった。待望の子宝に恵まれたのだった。子どもが生まれた後、２人で羽黒山神社と子宝杉にお礼のお参りに行った。

７. 長岡百穴　テーマ　：多様な人生への願い、人生の迷いの払しょく
主な対象：30 代から 60 代の幅広い年齢層

斜面に掘られた 52 基の横穴の古墳群。7 世紀前半に作られたといわれている。ここには多くの人生が埋もれており、多様な人生があったものと思われる。ここに来ることにより、様々な人生があるということに思いをはせることが出来る。人生に迷いが生じた時に静かに見直すパワーを与えてくれるパワースポットである。

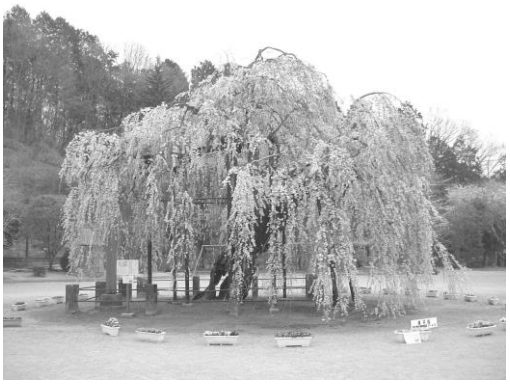


＜物語＞

子宝に恵まれ、順風満帆の生活を送っていた寛は、やがてマンネリの生活に疑問を感じ、人生に迷いを覚えるようになり、仕事をこのまま続けていいのだろうかと、悩むようになった。それだけでなく、昔の悪い癖が出て、家族を放っておいて、様々な遊びにも手を出すようになった。そんな折、仕事の関係で長岡百穴の前を通った寛は、穴の中から名前を呼ばれたような気がした。穴に入ってみると、そこにお地蔵さんがいて怖い顔で寛を睨んでいた。寛は、びっくりして外に出て、周囲の穴をみると、それぞれの穴から沢山の顔がのぞいていた。それぞれみんな違う顔をし、服装もみんな違っていた。「そうだ、色々な人生があるのだ、自分は今の生活をしっかり頑張ればいいのだ。」そう考えることが出来た。後日、家族で再び、寛を睨んでいたお地蔵さんを見に行くと、お地蔵さんは、笑顔で微笑んでいた。それから、寛は、今まで以上に一生懸命仕事に励むようになった。

８. 孝子桜　テーマ　：充実した生活、出世祈願
主な対象：30 代から 60 代の幅広い年齢層

城西小学校内にある樹齢 400 年の桜の木。雄大な枝垂桜で、気高い形態と豊かな花を見に、毎年多くの人が訪れる。徳川家がこの地に訪れてから権勢が高まったといわれてる。よりよい生活や人生における成功のためのパワーを与えてくれるパワースポットである。



＜物語＞

寛の会社は、安定期を迎え、今年で創立 20 周年を迎えた。子どもも順調に育っていて充実した生活を

送っていた。そんな中、某国で起きた金融危機の影響で、寛の会社も厳しい局面に立たされていた。しかし、持ち前の頑張りで危機的状況を脱し、会社は徐々に、金融危機前の業績を回復しつつあった。

久しぶりに、家族そろって花見に出かけた。寛は、孝子桜の気高く豊かな枝ぶり、枝一杯に咲き誇った桜を見て、この木が 400 年も前からこの地に立っていることに驚きを感じた。寛も孝子桜のように、しっかり地に足をつけ、会社を更に大きく立派にしていくことを誓った。

９.将軍塚古墳　テーマ　：人生の集大成への祈願
主な対象：60 代以降の年齢層を対象

根古谷台遺跡に隣接する周囲に溝を有する 2 段構成の円墳。7 世紀前半の築造とされている。
1500 年に渡り風雪に耐えて眠る古墳に臨み、自らの人生を振り返り、人生の集大成へ向けてのパワーを得ることが出来る。更に、後世に名を残す決意を新たにすることも出来るパワースポットである。

＜物語＞

60 代半ばを過ぎ、寛は、そろそろ会社を子どもに任せて、これからはのんびりと過ごしたいと考え始めていた。会社をここまで大きくできたし、ここらで、第一線の仕事から少し手を引いた方がいいのではないかと思い、祥子にもそう話していた。仕事が休みのある日、祥子と 2 人でいつものように散歩に出かけ、根古谷台遺跡に立ち寄って、竪穴住居や掘立柱建築を眺めていた。入口横には、浅い堀に囲まれた古墳があった。寛は古墳の上に登ってみた。すると、地面の下から、楽しげな歌声が聞こえた。

その歌声を聴いていると、寛は、又もや、体の中に何か熱いものが湧きあがってくるような気がした。今の仕事は子どもに任せるとしても、これからの人生、何か世の中のためになることが出来るのではないか。そうだ、これまで、私にパワーを与えてくれた、宇都宮のパワースポットの物語を書いて、多くの人に様々なパワーを与えるようにしよう。そうすれば、パワースポットが私に与えてくれたパワーに報いることになる。こうして、「宇都宮パワースポット物語」が完成し、長く後世に伝えられるようになった。

2）超魅力的なまちとするための施策

「宇都宮をパワースポットと物語で埋め尽くそう！」

私たちの提案したパワースポットの場所と物語は一つの例である。宇都宮には、パワースポットとなりうる場所は、ここで提案した場所以外に数多く存在している。私たちの提案した内容も参考にして、宇都宮市民の参加のもと、宇都宮らしいパワースポットを選定し、パワースポットごとの物語を作成する。更に物語を繋いで一連のストーリー化が出来れば、宇都宮を「超」魅力的なまちとすることなると考える。

そのための具体的な施策について、以下に述べるが、一連の事業は、市役所が直接担当するのではなく、宇都宮まちづくり推進機構などの組織が全体をマネージするか、あるいは、市内の経

済界などの協力を得て検討組織を新たに設ける等により対応する。行政とある程度独立した組織とすることが、宗教的な色彩もあるパワースポットという性格上も適している。
　また、パワースポットと物語の選定は、出来る限り多くの市民に参加してもらう必要があり、大々的なイベントとして立ち上げることも重要である。そうすることにより、市民に改めて宇都宮の良いところを見直すきっかけにすることができる。

〇パワースポットの選定
　パワースポットは、「霊的な力が満ちているとされる場所」あるいは「大地のエネルギーを取り入れる場所」で、他の場所とは違う雰囲気や景観あるいは歴史の重みがあり、何かしら気分を高揚させる力が感じられる場所である。人は、こうした場所で、その人の抱えている事情やその時の気分に応じて様々なパワーを感じることができる。従って、パワースポットで感じるパワーの種類も一つとは限らない。本提案ではパワースポットごとに特定のテーマ設定をしたが、パワースポットは一か所で様々なパワーを与えることの方が多いと考えられる。
　なお、パワースポットは実際その場所に行けることが必要で、立ち入りが出来ない場所であっては意味がない。もちろん、対象物（対象とする場所）を景観として眺められるところをパワースポットとして取り上げることは当然ありうるが（例えば、富士見坂のような場所)、その場所に行ってパワーをもらえるという条件は不可欠である。
・パワースポットの選定方法
　パワースポットの選定は、宇都宮市民と宇都宮に仕事や通学等で通っている人を対象に、パワースポットの候補を幅広く提案してもらうことから始める。
　パワースポットの場所とその簡単な由来、そして、どのようなパワーを与えてくれるのかについて、所定のハガキなどに明記の上、応募してもらう。メールでの応募も受け付ける。
　次に、候補となった場所を、検討のための組織又はインターネット上の投票等により、パワースポット百選の案を選定する。この場合、宇都宮市内の地域的なバランス等も十分に考慮する必要がある。

〇パワースポットの物語の募集
　選定されたパワースポットごとに、物語を募集する。その地域の謂われや伝承があって、それらを発掘できれば物語として最もふさわしいが、そうしたものがなくても、実際に体験したことやパワースポットを実際に訪れて感じたことなどをもとに、色々な主人公や時代、様々な場面に対応した、ありとあらゆる物語を創作し、応募してもらう。
　応募してきた物語は、宇都宮にとって相応しくないと思われるものを除いて、原則として物語集に掲載し公表する。物語はパワースポットごとに一つではなく、当然、複数の物語が出来ることが前提となる。この物語のうちいくつかを選び、パワースポットと物語とを併せた「パワースポット百選」を選定する。

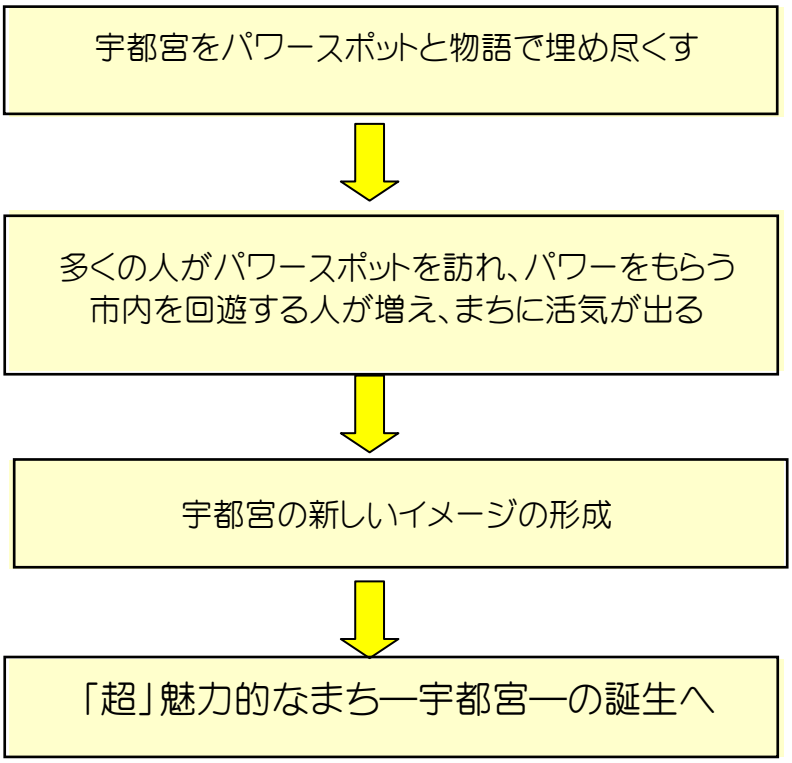
〇パワースポットによるまちづくり―物語のストーリー化とパワースポットマップの作成
➢　ストーリー化
　パワースポット百選で選定された多くのパワースポットと物語をもとに、パワースポットを繋げながら、宇都宮の典型的な人物（例えば、本提案の「寛」のような）を登場させ、その一生をストーリー展開する。あるいは、以下に列挙したような人生の一断面を捉え、それに関連する（同じようなパワーを与えうる）パワースポットと物語を繋げ、一つのストーリーとして展開する。この段階で、必要な場合は、百選で設定された物語の修正を行う等によりパワースポットごとに新たな物語を追加する。
- 大学受験・就職試験・検定試験などの試験に関連するパワースポット
- 恋愛や結婚に関するパワースポット
- 事業の成功に関するパワースポット

- 健康長寿に関連するパワースポット
- 試合や勝負に関するパワースポット　　etc

宇都宮には現在、ミヤリーというキャラクターが存在するが、パワースポットのストーリー化に当たっては、新たな主人公を登場させることも有効な方策である。新たな主人公として、宇都宮に由来がある人や宇都宮の偉人をモデルに選ぶことも可能であるが、典型的な宇都宮人と思われる架空の人物（様々な時代に対応できる男性と女性、それぞれ 2～3 人）を新たなキャラクターとして登場させ、そのキャラクターの一生あるいは人生の一断面にスポットを当ててストーリー展開することが、宇都宮市民にとっても親しみやすいものとなる。

➢　パワースポットマップの作成

パワースポットを実際に訪れてもらうためには、パワースポット百選に関するパンフレットの作成とパワースポットマップが必要である。「百選」については、現在の「宇都宮百景」のような見やすい資料とする。

マップに関しては、100 か所全体の道案内ができるものと、特定のテーマや特定の年齢層を対象としたマップの作成が必要になる。四国の 88 か所の巡礼のように、全ての箇所を巡る前提ではなく、気楽にいくつかのパワースポットを巡れるようにする。更に、市域全体ではなく地域別にパワースポット巡りが出来るようなマップの作成も有効であると考える。マップには、道筋の様々な名所や店などの情報を載せることで、より活用しやすいものとなるだけでなく、観光にも資することになる。

これにより、宇都宮の至る所に、老若男女がマップを片手に訪れ、パワー溢れる「超」魅力的な宇都宮のまちを創造することが出来る。